

命を尊ぶ

横田 法子

奨励者紹介[よこた・のりこ]

日本キリスト教団草津教会牧師

草津キリスト教学園信愛幼稚園園長

イエスが家に帰られると、群衆がまた集まって来て、一同は食事をする暇もないほどであった。身内の人たちはイエスのことを聞いて取り押さえに来た。「あの男は気が変になっている」と言われていたからである。エルサレムから下って来た律法学者たちも、「あの男はベルゼブルに取りつかれている」と言い、また、「悪霊の頭のカで悪霊を追い出している」と言っていた。そこで、イエスは彼らを呼び寄せて、たとえを用いて語られた。「どうして、サタンがサタンを追い出せよう。国が内輪で争えば、その国は成り立たない。家が内輪で争えば、その家は成り立たない。同じように、サタンが内輪もめして争えば、立ち行かず、滅びてしまう。また、まず強い人を縛り上げなければ、だれも、その人の家に押し入って、家財道具を奪い取ることはできない。まず縛ってから、その家を略奪するものだ。」

(マルコによる福音書 3章 20—27 節)

主イエスはガリラヤ湖畔を巡り福音を宣べ伝えていました。ヨハネによる福音書の冒頭に「初めに^{ことば}言^{ことば}があつた。言は神と共にあつた。言は神であつた。」とあります。主イエスは「肉となった神のことば」です。口先だけで神のメッセージを発するのではなく、生きざままで語っていました。その人格が、生きざまが神のことばでした。つまりイエスの宣教は「実践」でした。病の人に手を当てて、罪人として交わりを絶たれた人の友となり、貧しい人と共に生きようと生きる糧を分かち合いました。イエスとの出会いによって、イエスの人格を通して、神の愛が自分に注がれていることを確信した人々は、人間が人間を縛っているもの、命の尊厳を奪うものから解放されました。福音を知り、信じたことで生き方が変えられた、新たにされた人々の姿を見た人たちが、自分もその福音に与りたいと続々と主イエスの元に押し寄せていました。神はあなたを愛し祝福している。その愛に応えて胸を張って生きよ。たとえどんなに辛く厳しくとも、あなたは日々新たに生きられる。それが福音、つまり喜ばしい知らせ、罪の赦しの宣言です。

イエスの言動や民衆の人気を苦々しく思い、怒っている人たちもいました。エルサレムの律法学者とは、ユダヤ教の中心にいて、何が神の御心として喜ばれるのか、何が正しいとされるのかを最もよく知っており、人々を導く立場にいた人たちです。やがてイエスを十字架へと追いやるこの人々にとって、イエスは都合の悪い人物でした。自分たちの正しさが揺るがされるからです。邪魔者であるイエスの悪評を流すべく、苦し紛れに「悪霊の頭のカで悪霊を追い出している」と非難しました。神の御心を知って人々に伝えるはずの、ユダヤ教の指導者的な立場にいた人が、神さまの御心を理解できずにいたのです。しかし、神さまの御心を理解できないのは、実は敵対する人々だけではありませんでした。ここに注目したいのです。

21 節に「身内の人」が登場します。敵対する人ではなく身内の人「イエスを取り押さえて来た」とあります。取り押さえて来たのは「あの男は気が変になっている」と言われていたからと記されています。注目したいのは「取り押さえる」と訳されているギリシャ語がここで用いられていることです。この言葉は14章でたびたび登場します。「捕まえる」や「捕らえる」と訳されています。14章は祭司長たちや律法学者がイエスを捕えて殺そうと計略を立てるところから始まり、捕らえられたイエスをペトロが知らないと言って裏切るところまでです。身内の人たちがイエスを取り押さえてきたのはイエスを心配したのか、評判をおとすのはやめてくれという自分たちの心配なのか、読み取ることはできませんが、いずれにせよイエスの宣教を遮ろうとした身内の人、敵対する人と同様に、神さまの思いを理解できず、全く見当違いのことをしていたわけです。

3月3日に世界最初の人権宣言と言われている「全国水平社創立宣言」から百年を迎えました。「百周年」は一般的には喜ばしい、おめでたい響きです。しかし、水平社百年とは、人の命や尊厳が軽んじられる世が百年も続いてきた現実です。人権宣言を叫ばなければならない現実が今もなお続いているということです。^注今年10月に日本基督教団部落解放センター主催の研修会「第15回日本基督教団部落解放全国会議in京都」が開催されます。私はその実行委員をしていますが、講師の91歳の山本英子さんに、水平社五十周年の記念式典のことをお聞きしました。盛大な会に驚いて百周年にはどんなになるだろうと言ったら、先輩に「部落差別を百年も残させてなるものか!」と叱られたそうです。私たちの目の前にあるのは百年経っても差別撤廃を叫ばなければならない現実です。

先日3月11日には東日本大震災から経てきた年月を改めて意識しました。地震と津波と原発事故で奪われ脅かされた命と生活、悲しみや痛みを抱えながら必死で生きている人、壊された街やつながりを必死で復興しようとする人、必死で助けようとする人。その存在を忘れてはならないと訴えるようなテレビ報道が瞬時にウクライナの嘆きに切り替わる。公然と人を何人殺しても、人を殺せと命じても捕まらない。人殺しの道具を送り込んでも、人殺しする人を募っても、罰せられない。それをむしろ肯定的に報じさえもする。災害時には一人の命を助けるために世界中の人が協力する一方で、壊す必要のない生活と命を奪う戦争に参加する「義勇兵」が国家の元首によって公然と募集され、それに応じることが美談のように報じられている。戦争はなくなる、戦争になったら人が死んでも仕方ないという論理がまかり通ってしまう社会構造を容認している一人であるということが悔しい。そういうものだと子どもたちにすり込んでしまっている現実が悔しい。戦争ありきの国際法に対して、思考停止してしまっているという現実、私たちは今向き合われているのではないのでしょうか。

イエスを「悪霊の頭(バルゼブル)」と揶揄した人々は、自分たちに都合がよい社会構造が崩されることを警戒し、イエスのことばを封じるために十字架に追いやりました。けれども、十字架刑を決定づけたのは敵対者に先導された群衆の声の大きさでした。主イエスは「どうして、サタンがサタンを追い出せよう。国が内輪で争えば、その国は成り立たない。家が内輪で争えば、その家は成り立たない。同じように、サタンが内輪もめして争えば、立ち行かず、滅びてしまう」(マルコによる福音書3章23—24節)と言われ

ました。差別も戦争も内輪もめです。差別や戦争が存在する方が都合がよい人が存在するのでしょう。差別も戦争もよくないと思う人が多くても「差別は仕方ない」「戦争は仕方ない」と思考停止させる力が圧倒的に勝っているように思います。イエスを取り押さえた身内に自分の姿を重ねます。イエスに敵対していたわけではない。けれどイエスの宣教を遮った彼ら。なぜイエスを取り押さえに来たのだろうか、誰のために取り押さえようとしたのだろうか。考えてみましょう。

戦争が始まってしまったら、どうしようもできない現実を思い知っています。戦争における無差別大量殺戮を、軍の出撃命令という殺人教唆を、武器の提供という殺人幫助を、そういった公然と行われる命の冒涇を許さない、滅びに至る戦争という手段を行使させない世界を創り出す努力を人任せにしない。イエスはそのためにこの世に与えられ、十字架に追いやられるような道を避けずに歩まれ、神の愛に生きる世界、共に生きる世界を生涯をかけて示したのです。ガンジーは、世界中のキリスト者が聖書に忠実に生きたなら世界は変わる、と言ったそうです。人を縛っているもの、命の尊厳を奪うものから、私たちを解放してくださるイエスが、神の思いを理解できずに自分の都合を優先させる私たちのために十字架に向かう道を歩まれた。その意味をわが身に寄せて考えたいと思います。イエスに敵対していなくとも、そのつもりがなくとも、イエスのことば「肉となった神のことば」を封じてしまっていないか、それで命の尊厳を踏みこじることに加担していないか、思考停止せず考えたいのです。

[注] 奨励当時、2022年10月に開催予定でしたが、コロナウイルス感染拡大のため2023年9月に延期されました。

2022年4月27日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録